

2023年度 高等学院同窓会学術研究奨励金
研究成果報告書概要 (WEB 公開用)

高等学院長
高等学院同窓会理事長 殿

研究代表者氏名 [山崎 正太郎]

学年・組・番号 [2年 L組 14番]

研究課題: 日本社会党が55年体制の中で支持を広げることができなかった原因—西欧の社会民主主義との違いに注目して—

(英文) Why was Japan Socialist Party unable to expand its support under the 1955 system?; Focusing on the differences from Western Social democratic parties

研究概要:

(研究課題を選んだ動機、達成するための計画・目的・方法等について200~400字で記入してください)

2021年に実施された第49回衆議院議員総選挙において、野党第1党立憲民主党の敗北は、現在の野党に政権交代を起こしうる勢力が存在しないことを改めて有権者に示した。

だが、私は、健全な政治には、政権交代を起こしうる勢力の存在が不可欠だと考える。そのため、55年体制下の野党第1党であり、政権を奪取できなかった日本社会党が、国民への浸透に失敗した原因を考察することは、現代の日本の政治を論じるうえで非常に大きな意味を持つと考える。

日本社会党の歴史的展開を考察するにあたり、西欧の社会民主主義政党との相違点に注目した。かねてから、ドイツ社会民主党との党内改革の展開を比較する先行研究は非常に多い。本研究は、それらの先行研究を検証し、当時の党の機関が発行した一次資料を用いながら、社会党が支持の拡大に失敗した原因を明らかにすることを目標とする。

研究成果:

(研究の結果概要、結果に対するフィードバックや感想等について200~400字で記入してください)

本研究で、当時の社会党が抱えていた課題を、独自の視点で、ある程度明らかにすることができた。先行研究では、構造改革派の江田三郎氏の先進性が評価されることが多かったが、ゴードスベルク綱領と江田の構想を比較することで、江田の改革路線があくまでマルクス主義の枠内に留まっていたことが分かった。マルクス主義の維持は、社会党を階級政党論に拘束しつづけ、支持の拡大を妨げた。また、江田の著書を分析するうえで、江田の言論が混乱を招きやすい性質を持つことも分かった。

また、社会党が情勢を正しく分析していたとする見解も、当時の党が発行した文書を検証することで、誤りであることが分かった。党内民主主義の後退や社会のホワイトカラー化の軽視、誤った組織運営は、支持の拡大に致命的な打撃を与えた。一方、これらの点において、江田が比較的現実的に即した分析を行っていることも明らかとなった。

今後は、本研究で触れることができなかった地方政治における社会党の展開や、構造改革論を初めて提唱したイタリア共産党との相違点を中心に考察を行いたい。

研究者: (以下の、代表者・分担者は学年・組・氏名を明記する)

研究代表者 2年L組 山崎 正太郎

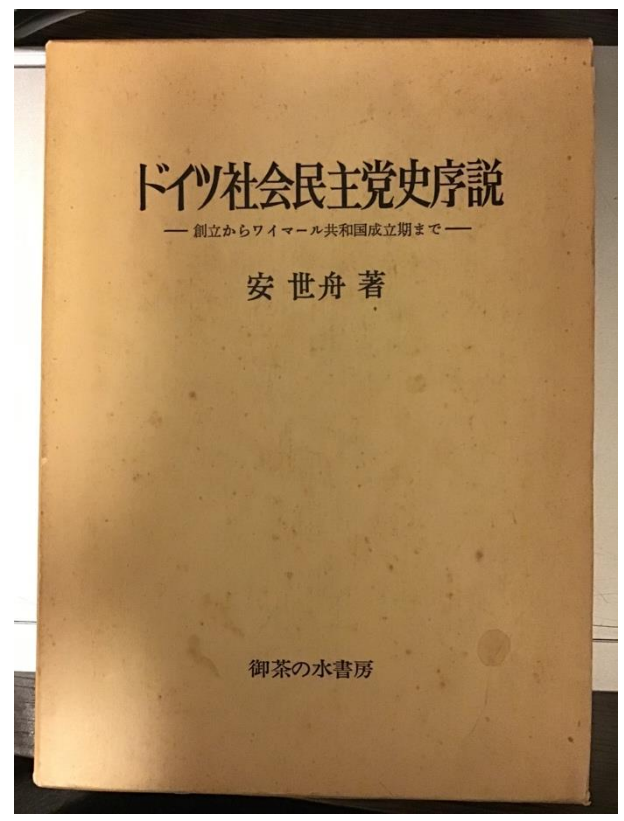
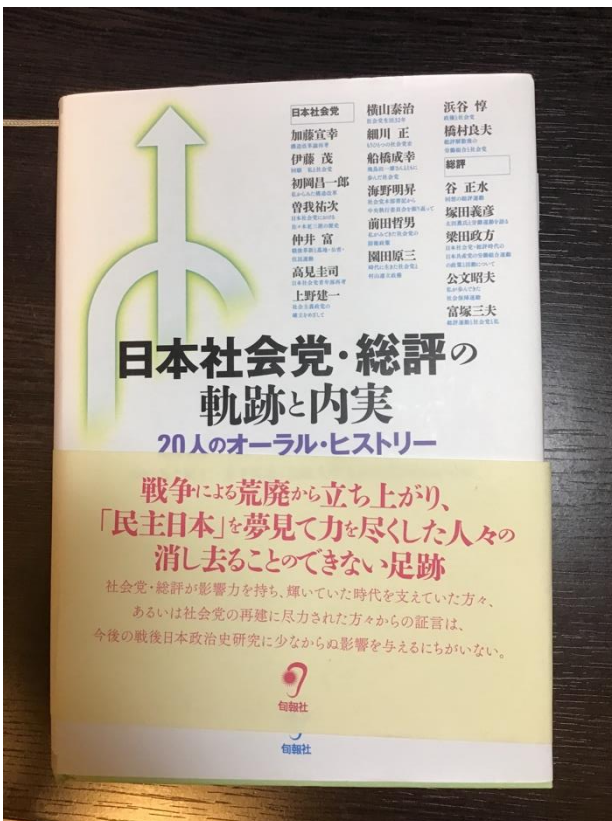
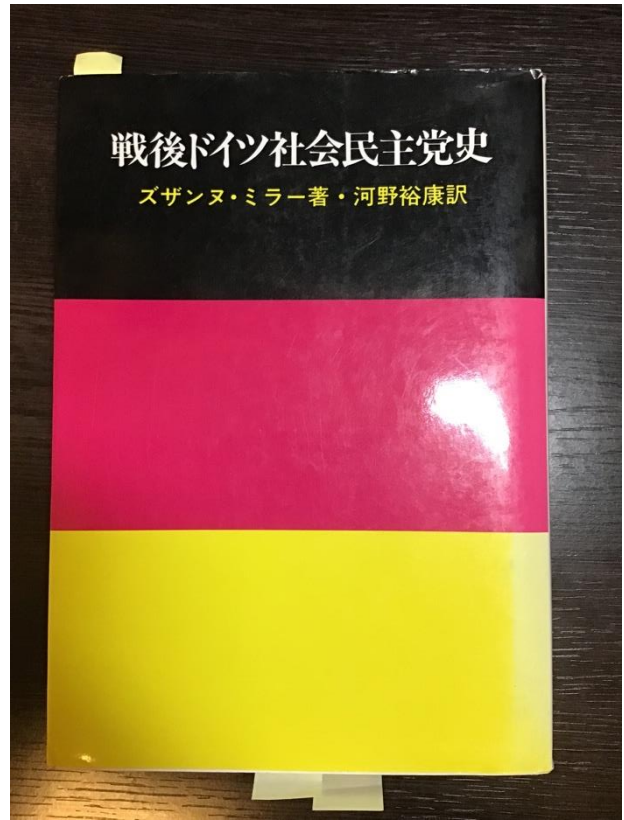
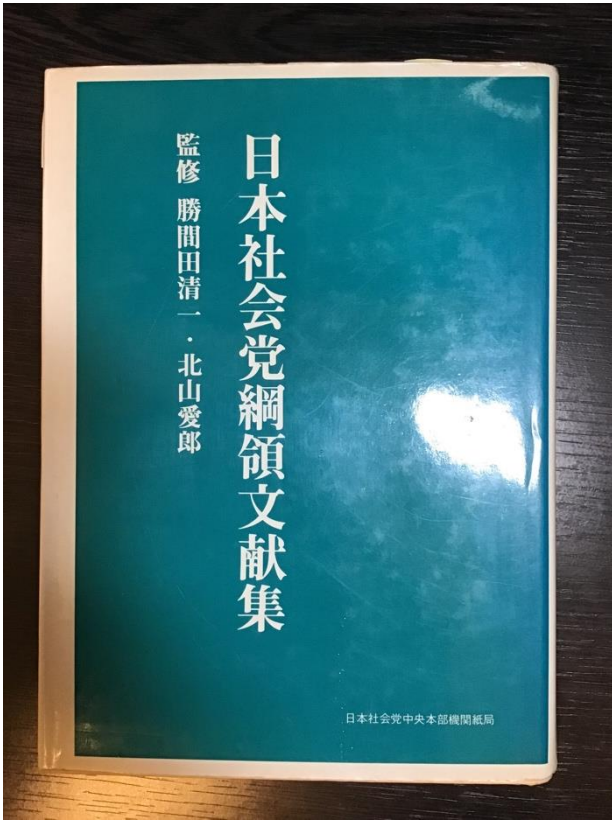
(受給額: 30000 円)

※研究課題、研究概要、研究成果、研究代表者名がWEBページ上で公開されることに同意します

(次のページに続きます)

研究成果写真:

(研究過程がわかる写真や、研究結果がわかる写真などを数点貼り付けてください)



以上